
CUT

咲雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CUT

【Zコード】

N1917BA

【作者名】

咲雪

【あらすじ】

記憶を全て失った理生が出会ったのは、雨のように儂い空気を纏う雨水。^{うすい}不思議と雨水に惹かれていく理生だけど、雨水には秘密があつて…。^{うすい}超能力系現代ファンタジー+恋愛の非日常ストーリーです。シリアスに行きます。携帯サイトの話を転載しています。名前は別ですが作者は同一人物です。

1 - 1 目覚め

：感謝している。

悲劇の中から生まれた出会いを。
あつてはならなかつたこの想いを。
今も私は、心から感謝しているよ。

夕焼けが空を覆つていて。

鮮やかな赤。

目の覚めるようなその赤は、何だか怖い。

よく分からぬけど、怖い。

まるで自分の様だと、空っぽの頭で何故だか思つていた。

ギシリと大きく音立てて、硬いベッドから起き上がる私。
その瞬間、体中が切り刻まれるように悲鳴を上げる。

自分の知らぬ間に刻まれた傷口から溢れるのもまた、憎いくらい鮮やかな赤で。

「ああ、嫌だな。

よく分からぬけれど、気分が悪くなる。

目に入る色を少しでも追い出そうと勢いよくカーテンを閉めた。

「目が覚めたのか？」

静かな室内。

そこに響いた男の人の声。

振り向くとそこには、中年の男性。

黒いステッツを着て、筋肉質な体をドアに預け、私を見ている。

「あまり動くな、酷い怪我だつたんだ。」

無表情なその顔に反して口から出でてくるのは心配の声。

そのアンバランスさがなんだか可笑しい。

ただ固まって彼を見上げると、彼はもう一声あげた。

「理生？」

「ああ、この人は私の身を察じていい。

そうは分かるけれど、田の前に溢れた違和感がひとつ。それに意識が傾いて、お礼も言えない。

「リ…オ…？」

繰り返し、でも戸惑つたようにそれを口にする私。

そこでやっと気付いた。

私…何も覚えてない、と。

頭はひどく混乱しているのに、室内は驚くほど静か。それはきっと、この人が落ちついているから。一瞬だけ田を見開いた後は、さつきと変らず私を見ている。

「理科の理に生まれると書いて理生。それがお前の名前だ。」

記憶がないのを察してくれたのか、彼はそう細かく教えてくれる。

「理生…。」

もう一度口にすれば、今度は体に馴染んだ。
その意味を、理解したからなのかもしない。

「貴方は、私のお父さんなの？」

ふと思い浮かぶ疑問。

声に乗せればその人は、首を横に振る。

「俺は美山和義。みやまかずよしお前の父親の友人だ。」

「ミヤマ、カズヨシ…」

聞いてはみたものの、父ではないと何故だか私は確信していた。
だから驚くべきことでもない。

ただただ言葉を繰り返す私をどう思つたのか。
それきり彼も押し黙り、部屋に沈黙が訪れる。

薬の匂い、色味のない病室。

はっきりと感じれるくらいの時間が経過する。

空の色はカーテンによつて見えない。

けれど自分に射す光がずいぶんと弱まったのを感じる程度には陽が沈んで。

そして小さく彼は言葉を落とした。

「退院したら俺と暮らそう、理生。」

この人が教えてくれたのは、名前だけ。
もともと口数の少ない人なのかもしれない。
たつた一言一言の、それだけの会話。

それでもはつきりと悟った。

…私の家族はもういないのだと。

「…うん。暮らそう。」

それでも涙の落ちない私は薄情者なのかな。

無表情のままだ頷いたのは、分かつていたから。

きっと今、私に手を差し伸べてくれる人はこの人だけだと。

1・2 温もり

病院の先生や和義さんの言う所によると、私は道端で倒れていったらしい。

体中ボロボロで、火傷や切り傷がひどかつたのだとか。

その日は、少し離れた場所で大きな火事があってニュースにもなつたと聞いた。

家は壊滅的、死者もたくさん出たという。

大きな家、そこは多くの人が住む近所でも有名な屋敷だった。

その家に偶然いた客人の一人。

見つかった死者の中からただ一人名字の違う中年男性と同姓だった私はそう判断されたらしい。

…記憶の残っていない私には何一つ分からぬけれど。

全てを忘れて再び目が覚めてから、どのくらいの日にちが経ったのだろう。

ベッドに縫い付けられて療養していた日々。

ただ窓を見つめ、綺麗な青空ならカーテンを閉める日々。

夕空は怖く、逆に雨は安心する。

無意識にそんな常識が私の中で完成されつつあった。

「よかつたな、理生。」

「…和義さん？」

今日も今日とて窓を見つめる日常。

音もなく病室へと入つて来た人物に顔を向ける。
相変わらず読めない顔。

ただ、彼は「よかつた」と、そう言葉を落とす。

「回復は順調だとよ。このままいけば8月には退院できるらしい。」

8月…それが途方もなく先のことに感じた。

まだ8月まで2カ月以上もある。

ここでの時間の流れは遅いから。

一日が始まって終わるまで、ただ空を見ているだけでは長すぎると。

「…そつか。」

でも、ここまで素っ気なく返せてしまうのは、私の中が無だから。
自分でも驚くほど、何にも興味が湧かない。
何をすればいいのかも分からぬ。
退屈な日々。

唯一、天候にだけ左右される私の感情。

たしかに彼から温かいモノを感じるのに、心は反応しなくて。
まるで心を動かすことを禁じられたかのように、私の表情は変わら
なかつた。

今日は雨。

カーテンを閉めることもなく、ほのかな光を眺める。
やつと歩けるようになつた体を引きずり窓へと手を付ける私。

ひんやりとした窓の温度が体に伝わる。

ガラスから僅かに反射する自分の姿。

今年15歳だという自分の顔は、意外と大人びていた。

長くて真つすぐな黒髪に、すこしつつた目。

確かにそれは自分のものであるはずなのに、実感がない。
まるで別人のようにさえ思えて。

「…変なの。」

ただぼつとそう言葉を落とした。

カラカラと私は窓を開ける。

5月下旬、ほのかに暑い季節。

べつたりと首筋に髪がかくみつく。

それでも私は雨が好きだと、そう思った。

雨の日は優しい。

車のライトも、太陽の光も、足音も、人の声さえも…雨は包みこむから。

光も雨も、雨は柔くする。

なんだかそれは、私も包みこんでくれるみたいで。

「屋上にでも行くか？」

ただじつと手を伸ばす私に気付いたのか。
和義さんは後ろからそう声をかけてきた。

振り向くと彼はその手に2本傘を持っている。

「うん、行きたい。」

自然と出でてきた声に、和義さんは小さく笑った。

“笑った”なんて言えるほど表情を変えたわけじゃないけど、そう感じた。

それを見て、ああ好きだな、なんて静かに思う。
こうして好きなモノが少しずつ増えていくんだろうか？

頭が空っぽになつて、感情すら分からなくなつて。

それでも何か大事なモノが帰つてくるような、そんな気がした。

和義さんに手を引かれながら、ゆっくり階段を上る。扉を開けて目に入った世界は、予想以上に明るかった。そして予想以上に柔く優しいものだった。

初めてここに来た瞬間に、雨の日の屋上は私のお気に入りになつたんだ。

「あら、理生ちゃん。今日も屋上？」

カーディガնを羽織り、傘を持つ。
そして病室を出てすぐに私は呼びとめられた。
そこにいたのは髪を後ろでお団子にくくつた女人の人。
白衣を纏つて、私を見つめるその目は温かい。

「シキヤ…先生」

確か誰かがそう呼んでいた。

私の担当ではないけど、たまに声をかけてくる若い女医さん。

「まだ完治していないから、無理はダメよ？」

そうにっこりと笑んだ後、彼女は去つてゆく。

雨の日に屋上で過ごすようになつて2週間。

少しずつ色々なことに田を向け始めたことが伝わったのか、私が屋上へと通うことに対する人はいなくなつた。

まだ退院できるほどに治つていらない体。

それでも外の世界に触れて、何となく時間が回り始めたようだ。

ベッドから抜け出して、生活リズムがつき始めたのは良いことだと、担当の先生も言つていた。

今は梅雨時期。

雨が多いのは嬉しい。

晴れた日はまだ外へ行く気になれないから、嬉しい。

仕事で忙しい和義さんがいない時でも、私は屋上へと行くようになつていた。

今日もゆっくり階段を上がつて、そつと扉を開ける。

今日は少し暗くて重い雲だったけど、やつぱり柔い世界だ。

傘が目に入る。
身の丈の何倍もあるフェンス。
近づいて、そこから街を見下ろす。
ここは人通りが多いらしく、常に車のランプが光り、色とりどりの傘が目に入る。

ただそれを眺める私。

それだけでも、何だか楽しかつた。

他の人がどんなふうに生活しているか、一部だけでも見ることが出来たから。

「雨が好きなの？」

ぽつり、そう声が響く。

突然の人の気配に驚いて、パッと振り向く私。

そこにいたのは淡い男の人だった。

茶色のフワフワとした髪、大きな目、色白の肌。
すらりと細い体。

薄い水色のポロシャツと縁がかったジーパンがよく似合っている。
たぶん年上なんだと思う。

見た目は若いけど笑みが落ちついているから、そう思った。

「こつも雨になるといふよね。雨が好きなの？」

男性にしては高い声。

でもうるさくなくて柔いその声が、なんだか雨のようだと思つ。

「好き、です。貴方も好き？」

雨降る屋上には来ない。

初めての来客に思わず問い合わせる私。

「僕は…嫌いかな。」

そして返ってきた答えに私は目を丸くした。

「勿体ない。」

「え…？」

「勿体ないよ。」

目の前に立つこの人は、きっと誰よりも雨が似合ひのに突如湧きあがつたそんな思いに、心は支配されて。

「雨は優しいよ。」

そう言ひえば、今度は彼が私と同じように目を丸くした。

そして少しの沈黙

目を閉ざして私は雨の音を聞く。

ほり、やっぱり雨は優しい。

こんな辺り一面に音が響いているのに、ちっとも耳が痛くない。

「君は不思議だね。」

耳に届いた声はやっぱり柔い。

目を向ければ、彼は悲しそうに笑っていた。

その顔に何故か無性に胸が締め付けられて。

「僕は狩野^{かの}雨水^{うすい}よろしくね。」

なんだか目が離せなかつた。

1・4 晴れ

狩野雨水、彼はそう名乗った。

柔く手優しげで優い…本当に雨のような雰囲気をもとつた人。

「雨が嫌いなのに雨水？」

一度そう聞けば、彼はそつなんだよ、と軽く笑つて空を見上げた。
その横顔が、ただ単純に奇麗だと、そう思った。

「今日は元気がないな。」

今日も静かな病室に野太い声が響く。

振り返らずとも誰なのか分かつて、私は声をつなぐ。

「雨じゃない日はいつもこんな感じだよ、和さん。」

カーテンの閉めきつた薄暗い室内。

表情なんてさして見えないので、私の様子を感じとつて彼は苦笑す

る。

和義さんを“和さん”と。
そう呼ぶようになるまで、私達は馴染んでいた。

まだ一ヶ月もたっていないけど、彼は私のことをよく理解してくれる。

たとえば、今私がそれとなく不機嫌なことも気付いてくれているだる。

でもそれを口に出さず、ただ側にいてくれるのがこの人の優しさなんだと思つ。

相変わらず会話は少ない。

でもこの人は私を否定も拒絶もない。
心底困つてどうしようもない時にだけ、そつと面もなく手を貸してくれる人。

温かいと思つた、とても。

「晴れの日は嫌い…。」

ぽつりと私は言葉を落とす。

和さんは何も言わない。

それに甘えて、どんどん弱音を口からもひす。

「晴れの日は、みんなつるわこ。」

弱音と言うよりは愚痴だ。

ただのないものねだりな気もするけど。

梅雨も明けようとしているこの時期。

少しずつだけど、雲の切れる日も増えてきている。

それは私にはあまり嬉しくないことで。

…晴れはいまだに苦手。

あの鮮やかな夕日を思い浮かべると、やっぱり体が震えだす。

理由もなく吐き気に襲われて。

火事で目にした火の赤と、あの夕陽を無意識に重ね合わせているのかかもしれない。

心の底に“赤は怖い”という気持ちが植えつけられているとカウンセリングの先生は言っていた。

そうなのかもしれないし、違うのかもしれない。

いまいち納得しきれないのは、その火の赤を、私が全く憶えていないから。

そして、それ以上に晴れを嫌いになつた理由。

それは、実感してしまうから…かもしれない。

晴れた日はみんな華やぐ。

「いい天気ね。」と、それだけでほんのりにぎやかになる院内。

幼い患者さん達は、外が明るいと決まって仲間を引っ張り散歩に行きたがる。

お見舞いの数も、晴れの日は心なしか多くて。

パタパタと楽し気に足音が病室の前をかけてゆく。

：私はその輪に入れないから。

初めはそれどころじやなかつたけど、今こうして落ち着き始めてから気付いたことがある。

私の元に来るのはただ一人だけだと。

そう、和さん以外、私をお訪ねてくる人は誰もいない。

雨の日以外は病室にこもる私に親しい患者さんもない。

記憶を失う前に繋がりがあつたと思える人すら出会っていないくて。

ああ、本当に私は打ち捨てられたみたいだと。

何だかそんな気分になつて一人勝手に落ち込んでしまう。

和さんがいるだけ恵まれているだなんて心すら持てず、狭い心の私。

それでもやつぱり定期的に見舞つてくれる和さんは優しい。
複雑な思いと共に迎える晴れは心が疲れた。

『僕は…嫌いかな。』

ふと、そう言つたあの人の言葉を思い出す。

柔くて儂い、名前すらもそのまま雨の人。

私とは正反対の考え方を持つあの人の悲しそうな笑みが今も忘れられない。

「…会いたいな。」

何故だか、そう思った。

太陽のように明るいわけでもなく、温かい訳でもなく。
でもひんやりとして柔い、そんな彼にとても。

思い浮かべて目を閉じれば、そこに広がるのは灰と透明に包まれた
世界。

私が好きな、柔い風景。

しばらくそのまま思い出に浸れば、夢か現か分からなくなつて。

「久しぶりだね、理生ちゃん。」

前に見た時より大人びて、そして嬉しそうに笑うその人がいた。
弱々しいけど、確かに輝くその音が、何だか幸せで。
私の頬は気付けば上がっていた。

最近夢を見ることが多くなった。

… あの人のいる夢ばかり。

夢の中の彼は今会う彼よりなぜか大人びた外見で。

そして夢だと認識できるようになるほど、彼は毎回同じことを言つ。何度でもいつだって繰り返される言葉。あの柔い顔を悲しそうに歪ませて。

「僕は呪われている。」

そう、真剣に言つんだ。

その日は、目覚めが珍しく遅かった。

いつもかなりは役に目覚めるのに、その日起きたのは普通の朝の時間帯。

テレビが騒がしく人々を送り出し、道にはぽつぽつとランダセルを背負う影が見える。

何故だらうかと何気なくあたりを見回す私。

その原因は視界に移った窓からの景色がすぐに教えてくれた。

「雨…」

どんより重たい雲が太陽を完全にふさいでいる。
光の射さない天気に包まれて、いつもより長く夢の世界にいたらし
い。

『僕は呪われている。』

彼は今日の夢でもそう言った。
その前後、どんな会話をしていたのかなんて覚えていない。
けど、確かにその言葉は発していた。

何度も何度も繰り返されるその言葉。

雨水さんの夢を見るようになつて一週間と少し。
欠缺ことなく、まるで私にそれを忘れるなと告げるように、彼の声
私の中に漫遊している。

「呪われているって何に…？」

まづじと表に出でてくる疑問。

たかだか夢なのに馬鹿みたい。

そんな考えは浮かんでこなかつた。…不思議と。

「理生……？」

「あ、和さん。おはよー。」

「…ああ。」

ただ、その思考は和さんの登場で轟^{クラク}がかかつたまま消えた。
あっけなく。

少し激しい雨音が部屋に響く。

『飯を食べる頃には和さんも仕事へと行つて。

あまり酷い雨の田は体が冷えるからと、屋上へ行く許可が下りない。

もしかしたら雨水さんがいるかもしれないのに。

そう思うと心が騒いで仕方ない。

何だか無性に彼に会いたかつた。

雨のような人。

側にいると不思議と落ち着く人。

まだ片手で数えられるくらいしか会っていない。

けれど、彼は雨の日にそこにいた。

雨が嫌いなのに、雨の日にいた。

何を話すでもなく、ただ空や街の流れと一緒に見つめるだけの時間。

事実、初めて会った時以来、私達は挨拶以外の言葉を交わしていない。

それでも居心地は良かつた。

…どこか似ていると思つたから。

全身でやびじって音もなく叫んでいたりとか、私と同じだつて。

一つずつ体に宿る感情。

皮肉なことに寂しさを教えてくれたのは晴天の日で。にぎわう院内の様子を耳に入れて、突如湧きあがった感情。

そこには、今まで訳も分からず感じていた心の空洞の正体だった。

「理生ちやん、こんばんは。」

「シキヤ…せんせい?」

雨音だけの部屋に声が響く。

たまに見かける女の先生。

私の担当じゃないのによく気にかけてくれる先生。

彼女はにこりと笑うと、透き通った声で言葉を紡ぐ。

「今日は外に出られないで残念ね。」

「どこか楽しそうに話す先生の真意が分からず首をかしげる私。先生は笑顔のまま言葉をつづけた。

「理生ちゃんにね、お密さんを連れて來たの。」

「お密さん…？私、に？」

「ええ。実はちょっとした知り合いでね。理生ちゃんにぜひ会いたいって。」

そう告げて、先生はふと後ろを見つめた。

「つー。」

それが合図となり姿を現したのは…

「理生ひやん、めがねさん。」

いつもと同じく、優しい笑みを浮かべた、彼だった。

1・6 雨水

病室にやつてきた雨水さんを見て、私の胸は熱くなつた。
おかしな話だけど、ああ、この人はちゃんと生きているんだと実感
できてる。

雨の日にだけ出会う雨水さん。

それは、どこか妖精のようにすら見えていた彼が、現実に入つてき
た…そんな瞬間だった。

「雨水さん…？」

「色矢先生から聞いたんだ。ごめんね、突然。」

驚いて固まる私に、雨水さんが苦笑する。
ぼつりと独り言のように落とされる謝罪。
ゆるく首を振ると、音もなく彼はほほ笑んだ。

「誰かのお見舞い…ですか？」

言葉が何も見つからない。

場所が違うだけで妙に緊張してしまって、ついその場任せな質問を口にしてしまう。

いつも通り私服姿の彼。

私のようにパジャマじゃない。

入院患者じやないことは明らかだつた。

でもただの通院だつたら、屋上になんてきつと来ないと想う。

「うん、妹がね。」

返ってきたのは予想通りのもの。
でもその声があまりに苦しそうだつたから、それ以上何も言えなかつた。

再び訪れる沈黙。

室内には雨の音が響いて。

「… やびしい？」

ぽつりと彼は言った。

唐突なそれに、ただ見つめ返すしかない私。
彼の目は真っ直ぐだった。

答えを求めている訳じゃないのかかもしれない。
ただ、何かを吐き出したかったのかもしれない。

真っ直ぐ見つめてくるくせに、彼はしばらく口を開かない私に問い合わせ
直さない。

そつと見つめ返すと、彼の目はどこか揺らいでいた。

…同じだ。
そう思つ。

どうしようもなく抱える、この焦りとさびしさ。

言い様のない気持ちを、この人もきっと知つてていると。

「さびしい…さびしいよ。」

答えなんて言わなくともきっと伝わっていた。
それでも口に出したのは、求めていたから。
この狭い世界で、果てしない孤独から救つてくれるその手を。

自分の知らない所で抱えた傷。

卑しいと思われようと、私には必要だった。
この傷をなめ合つてくれる、そんな存在が。

一人ではない弱い私。

でもこの人は気付いてくれたらしい。

小窓へ口端を挙げて、そつと頭を撫でてくれる。

初めて感じたその手は予想通りひんやりとしていて。
それでも触れてもらつたそこからほのかに熱が生まれるから不思議だ。

どうじよつもなく心が落ち着いて、心地よくて、思わず目を開じる。

ああ、おかしいな。

わざわざ寝て起きたばかりだといふのに、
ゆるやかに、そして幸せな気分になつて、意識が沈んでゆく。

「怖いよ、たすけて。」

意識が完全に途切れる直前、そつ口に出したことなんて知らなかつた。

私は確かに温かな感触の中で眠つて落ちたんだ。

「…幽水？」

「「」の子の傷は深いんだね。」

「え？」

「理生ちゃんから何の記憶も“流れて”こなかつた。完全に封印しているんだ、過去を。」

そんな意味深な会話がなされていたことも、私は知らずにいた。夢を見ていたんだ。

『理生、私達はもう会つてはいけない。お別れだよ。』

見たこともない女の人にそう告げられた夢を。

『雨水さん、ごめんね。私達、もう会つちゃいけない。』

…それと回じーとを、彼に叫ぶ夢を。

たかだか夢。

そうであるはずなのに、とてもなく悲しくて。自然と涙があふれていた。

「雨水。あなたまさか“力”を使ったの？」

静かな病室に声が届く。

義兄のいとこ、何かと僕達の世話を焼いてくれる色矢^{しきや}遊奈^{にな}の声。

そつと理生ちゃんの頭から手を話し、僕は振り返った。

「……めん。」

小さく謝るのは、彼女の言葉が事実だったからだ。
そう、僕は理生ちゃんに“力”を使った。

人ならざる力を。

「でもこの子の記憶は読めなかつた。完全に拒絶されている。」

一言告げれば何か言いたそうに僕を見つめる遊奈。

何を言いたいかなんて分かつてていたけど、知らないふりをする。自分でも分かつていてから、尚更に。

目の前の理生ちゃんに再び僕は視線を落とす。
雨の日に出会った不思議な女の子。

『勿体ない。』

雨が嫌いだと告げた時に返された言葉がまだ耳に残っている。

雨なんて下にしか落ちない。

地はゆるみ、ドロドロで。

どんよりとした雲が拍車をかけるように、人々の気分を重くさせる。

ずっと自分のような雨が嫌いだった。

良いことなんて何もない、自分などいない方が良いのだと、そう思っていた。

『雨は優しいよ。』

だから衝撃的だつたんだ。

雨が好きだと、そう言つて空を見つめる君の存在が。

まるで自分の存在をも認めてくれたような気持になつて。

雨が好きであの場にいた彼女。

雨が嫌いで、それでもどこか良い所はあるかもしけれないと、諦めきれずあの場に向かつた僕。

理由は真逆。

それでも、僕たちはどこか似ていた。

体中で叫んでいたんだ。

“さびしい”と。

怖い、助けて…と。

「…お兄ちゃん？」

僕を呼ぶか細い声。

振り返れば、そこには妹の姿。
14歳のわりに小柄で幼い顔。

「夢香^{ゆめか}、どうしたの？」

「お兄ちゃんがいなかつたから…。」

「そつか、ごめんね。戻ろうか。」

小さな手に自分の冷たい手を重ねる。
震えが生々しく伝わって、胸に抱くのは罪悪感。

だつてこの子は僕が守らなければいけない。
この子には僕達しかいないから。

「雨水。」

病室を出る間際、迩奈に呼びとめられる。
迩奈の顔は今、歪んでいるのかもしれない。
声には陰り。

「あなた、まさか理生ちゃんのこと好きだった？」

問われるその内容に、思わず笑ってしまった。

「あり得ないよ。」

即座に否定する僕の口。

振り返れば、迩奈が息をのむ。

きっと今の僕は、誰よりも醜い顔をしている。

「だつて僕は…」

酷い笑みを浮かべているのは分かつていた。
けれど止められない。

「僕は、呪われている。」

…知つてゐるから。

人とは違つたこの力と引き換えに背負つてしまつた宿命を。
この体中にめぐる毒を。

でも僕は本当の所、なにも分かつていなかつた。
理生ちゃんとの出会いで全てが大きく動きだしていたなんて。
気付けるはずもなかつたんだ。

「雨水、さん。」

「理生、ちゃん…？」

変な夢が今日も私の心を支配する。

たとえば今。

雨の屋上、とても大人びて見える雨水さんの姿。

なぜかその顔は歪み。

なぜか私の喉は空氣を通してれない。

胸は張り裂けそうで。

「久しぶりだね、ここで会うのも。」

会話だつてどこかおかしい。

それでも私の口は止まらないんだ。

「お礼を、言いたかったんだ。…薪水さんご。」

「お礼…?」

「あつがとつ。…私と出会いてくれてありがとう。」

「云えれば、やひでゆむ彼の顔。

「じつか夢香りやせせじりしてへ。」

…コメカつて誰なのかすら分からぬ。

それなのに、私の口からスラスラ出てへる言葉。

意味が分からない。

何が何だかさっぱり分からない。

でも…

「待つて…！」

そう呟ぶよつて浮びとある声が。

「どうして、行く気…なの?..理生ちゃん。」

私を案じるその冷たい手のぬくもりが。
無性に恋しくて、涙が止まらない。

「雨水さん、」めんね。私達、もう会つちやいけない。」

自分の涙が雨と混じる。
ああ綺麗だと、そんなバカみたいなことを思った。

その頃には、それが夢だったことなど忘れ。
現実世界に呼び戻されなければ、きっと立ち上がりれないほど苦しかった。

ガバッ！

勢いよく、私は起き上がる。

上下する肩に、キリキリ痛む胸。
冷や汗、震える体。

見える真っ白な世界の片隅に、見知った顔があつた。

「和、さん…。」

「ずいぶんうなされてたな、嫌な夢でもみたか？」

心配そうに肩に手を置かれる。

その瞬間、どつとあふれてくる安心感。
あれは夢だったのだと、実感できて。

「変な夢、みた。」

「へえ。」

適当な返事の和さん。正直それが気楽でありがたかった。

：雨水さんが病室に現れてから一週間。
あれ以来、雨は降っていない。

テレビでは梅雨明けが宣言されている。

「理生。」

「なに？」

少しの間が空いてから、呼ばれる音。
顔を向ければ和さんが心なしか安心したように声を繋げた。

「退院の日付が決まった。」

「…え？」

「予定が早まつてな。来週だ。」

そして告げられたのは、別れの合図。
すぐに思い浮かんだのは、雨水さんの顔だった。

雨、降らないかな？

そう思つ。

せめてお礼を言いたい。

孤独だつた私に、寄り添つてくれた優しいあの人。

しかし、無情にも雨は降つてくれなかつた。

和さんに背を押されて遠ざかる病院。

彼に会うことはなかつた。

…この頃の私はあちこち欠けていて。

それでも新しい日常が始まったこの15歳の数ヶ月を忘れることがないと思つ。

だつてここには大事なものがつまつっていたから、。

5年経つた今でさえ、鮮やかに思い出せるほどに。

2 - 1 5年後

初めての“外”は戸惑いだらけの世界だった。

知っているモノ、知らないモノ…色々と混ざり合つ世界。

よく分からぬままガムシャラに過ごした数カ月。

高校生というものになって、友達というものにも囲まれた3年。
そして奇跡的な合格を経て大学生になってからの2年。

退院して5年という歳月が経っていた。

15歳だった私は20歳に。

長いと言われば長く、短いと言わればそんな気もする、そんな
時間。

たくさんの人に出会った。

たくさんの人と別れた。

思っていた以上に外の世界はめまぐるしくて。

それでも色あせることなく思い出す人がいる。

「へへ、どんなイケメンなの那人?」

「…。」

「…面倒になつたら黙る癖、なんとかしなよ姉さん。」

カラソッシュとグラスの中にある氷が音をたてる。

目の前の少女は相変わらず正直に言葉を紡いでる。

お団子頭の茶髪に、大きな目。

高校の時の同級生である彼女・花音と会うのは半年ぶりだった。
退院してから高校に入学した私は年がひとつ上。

その上記憶喪失の影響で色々分からぬことだらけという面倒くさい私の友人でいてくれた数少ない女の子だ。

「でもなあ、姉さん大人っぽいのにそいつた噂なかつたのはワケアリだつたからなのか。」

納得するように頷く花音。

花音の方がよっぽどしつかりしているのに、“姉さん”と呼ばれる事実に私は未だ慣れていない。

「花音、いい加減私のこと名前で呼ばない？」

そつは言つけど、返つてくるモノはいつも同じ。

「無理。もう姉さんは姉さんで固定。」

それとなく話をそらしたことがバレたのか、花音はブクーッと頬を膨らませた。

「姉ちゃんと恋バナしたいのに。」

「あなたはどうなの？」

「私は聞く専門。」

大学の2年生にもなるところに、浮いた話のひとつもない私達。話す内容はもっぱらお互に近況報告。

でもそれでも私は十分。

気負わず話せる存在は心を落ち着かせるから。

「やうこそねえよ……」

ふと思いついて私は声をあげる。

ストローに口をつけたまま首をかしげる花音。

「回収会やるんだって。如月先生も来るらしいよ。」

聞いた話をそのまま出すと、田の前の顔がパツと華やいだ。

「えつ、本当ー? 何々、どじ情報?」

「葉山君から聞いた。」
はやま

「あー、そう言えば大学同じだもんね。」

葉山君。

高校の時同じクラスで、いま現在も私とは同大学同学科の青年だ。大柄で短髪、つり目に眼鏡の彼は、物静かで学業優秀。今回の同窓会に関して、幹事を押し付けられたとボソリつぶやいていたのを覚えている。

「てか姉さん、葉山と仲良いの?なんか発展しそう?」

「だーかーらー、何でわざわざ話がいくのさ。」

恋愛話に飢えているのか、話をそしづへと向ける花音にため息をしつつ席を立つた。

「ちよっとトイレ行ってくる。」

「はーい、帰ってきたら葉山との話みっちり聞くから。」

あくまで引き下がらない友人に苦笑しながらその場を後にす。

そこそこ満員の喫茶店。

よく前も見ず歩いていたのが良くなかった。

トンッと小さく音がたつて何かにぶつかる。

目の先にいたのは小柄な女性。

フワフワとパーマのかかったこげ茶に丸くて大きな目、小さめの鼻と口。色白の肌。

何故かトクンと心臓が打つ。

「「めんなさい、大丈夫ですか？」

声をかければ、その人は穏やかに笑い「大丈夫です。」と答えた。
その声が、どこか懐かしくて泣きそうになる。
透き通った、でも悲しげにゆれる声。

動揺を隠すように足早に私は立ち去った。

「“理生”ちゃん。」

その小さな口が私に向けてそう呟いたこと、私は知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1917ba/>

CUT

2012年1月5日21時49分発行